

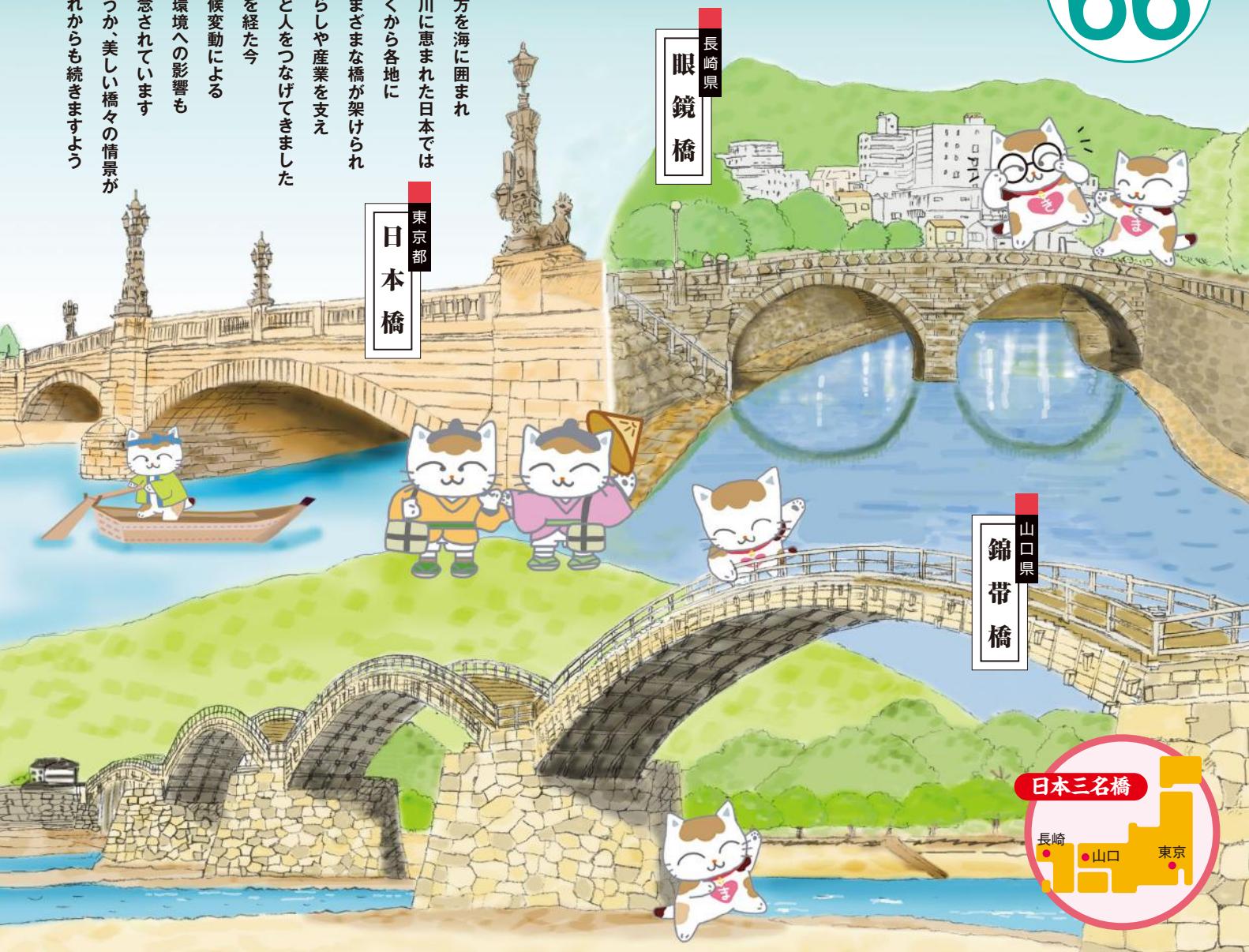
# まねきねこ

ヘルスケア関連団体のネットワークを支援する情報誌

2025

Vol. 66

四方を海に囲まれ  
山川に恵まれた日本では  
古くから各地に  
さまざまな橋が架けられ  
暮らしあり業を支え  
人と人をつなげてきました  
時を経た今  
気候変動による  
水環境への影響も  
懸念されています  
どうか、美しい橋々の情景が  
これからも続きますよう



1・2

## 対談

PPI(患者・市民参画)パネルも始動

今後のヘルスケア関連団体に期待される役割としてのPPI  
北村 篤嗣 ファイザーR&D合同会社/R&D Head Club  
奥田 伊奈葉 グラクソ・スミスクライン株式会社/R&D Head Club

第3回

3・4

## FOCUS ON フォーカスオン 第18回

研究者や企業に働きかけて治療薬開発を実現  
車いすユーザーのためのアプリも開発し、社会貢献を目指す  
NPO法人 PADM 代表/認定NPO法人 ウィーログ 代表理事 織田 友理子

5・6

## 活動紹介 ヘルスケア関連団体ネットワーキングの会

第55回 関東学習会 第36回 北陸学習会  
第46回 東北学習会 第47回 沖縄学習会

VHO-net

第5回

## ヘルスケア仕事探訪

精神保健福祉士

患者さんを  
考える

「知りたい情報」は何かを考え、日々進化する情報サイト

## Report the ファイザープログラム

助成対象プロジェクトのご紹介

一般社団法人 OHANA  
認定NPO法人 FaSoLabo京都

代表理事 赤松 未来

理事 小谷 智恵

## 患者の力

人類にとってのケアの姿とは

慶應義塾大学 名誉教授 加藤 真三

デジタル配信への切り替えのお知らせ/書籍・イベントのご案内

7

8

9・10

11・12

13・14

CONTENTS

CONTENTS

# PPI（患者・市民参画）パネルも始動 今後のヘルスケア関連団体に期待される役割としてのPPI

ヘルスケア関連団体の皆さんと広く知つてほしい取り組みや伝えたいテーマについて話し合つていただく対談企画。今回は当事者との協働を目指す「R&D Head Club（以下、R&Dヘッドクラブ）」のメンバーに、医薬品開発における課題やヘルスケア関連団体への期待を語つていただきました。



早くからPPIの推進に注力  
VHO-netにも  
ボランティア参加  
**北村 篤嗣さん**  
ファイザーR&D合同会社  
R&D Head Club



製薬企業の立場から  
患者との協働に  
取り組む  
**奥田 伊奈葉さん**  
グラクソ・スミスクライン株式会社  
R&D Head Club

聞き手  
ファイザー株式会社  
コミュニティ・リレーション部  
VHO-net 監事  
**喜島 智香子さん**



## 日本初のPPIパネルを作成

2025年4月、R&DヘッドクラブとVHO-net<sup>※1</sup>はPPI<sup>※2</sup>（患者・市民参画）促進に  
課題があるので、日本初のPPIパネルを作成する  
重要な役割を果たしています。

関するパートナーシップ契約を締結し、今後、  
日本初のPPIパネル（当事者登録制）の作成  
を予定しています。まず、R&Dヘッドクラブに  
ついて教えてください。

**北村さん**

2005年に日本の製薬企業の研究開発部門長を中心に構成された任意団体です。新薬開発・承認にかかる問題点を討議し、日本の規制当局、政策決定者、医療従事者、アカデミア、患者団体などとの議論を通じて、製薬企業の開発プロフェッショナルとしての大膽な提言を行い、グローバルな革新的医薬品の開発に寄与することを目指しています。最近では「治験のさらなる効率化（エコシステム）」にR&Dヘッドクラブの提案が多く採用され、治験の同意説明文書（ICF<sup>※3</sup>）を共通化する「ICF共通テンプレート」の提案や推進にもかかわるなど、日本の医薬品開発について重要な役割を果たしています。

**北村さん**

まず、患者さんや市民の方には、治験自体があまり知られていないこと、PPIに参加する方が限られているという課題があります。また、海外、特に欧米で開発・承認された薬剤に対して、日本での承認に時差が生じるドラッグラグ、日本で承認されないドラッグロスの問題があります。その理由としては、近年、開発される薬剤の過半数がバイオベンチャーエンタープライズによって生み出されていることがあります。最も大きな市場である米国で承認される薬剤が圧倒的に多く、ヨーロッパも米国とデータの相互利用が進んでいることから、米国とヨーロッパではドラッグロスはあまり生じていません。ところが、小規模なバイオベンチャーエンタープライズは、これまで特有の規制があり、英語圏ではない日本での治験などの対応が遅れがちなのです。

**奥田さん**

小児での治験が特に進めにくいいというのも課題だと思います。また、特定の細胞やがん種をターゲットにするような薬剤が増えたことで、小規模のバイオベンチャーエンタープライズが増えて、小規

※1 VHO-net：（一社）ヘルスケア関連団体ネットワーキングの会

※2 PPI：Patient & Public Involvement

※3 ICF：Informed Consent Form

## R&D Head Club

2005年設立。日本の製薬企業の研究開発部門長を中心に23社に  
より構成される(2025年9月現在)。

<https://rdhead-club.com/>



欧米ではPPIが進んでいるようですが、そもそも、なぜ、医薬品開発にPPIが重要なのでしょうか。

北村さん 最終的な医薬品のユーザーである患者さんの声を聞き、要望に応えていくことは当然の流れです。医薬品開発に患者さんの声を取り入れるということに関しては米国よりヨーロッパの方が進んでおり、患者団体、大学、非営利団体、製薬企業が参加した「全欧州革新的医薬品イニシアティブ（IMI<sup>※4</sup>プロジェクト）」の一つに、欧州患者アカデミー（EUPATI<sup>※5</sup>）と

いう医薬品の研究開発に関する患者さんの知識向上を目指した教育機関があります。ヨーロッパでは文化的にダイバーシティ・エクイティ＆インクルージョン（DE&I<sup>※6</sup>）という考え方が浸透しており、医薬品や医療の受益者である患者さんの声が重要であると認識されているようです。

品開発ができるという背景もあると思います。ただし、保険の仕組みが日本とは異なるため、米国だけでなく、欧州各国でも承認されていても薬剤が使えない場合があることは認識しておく必要があると思います。

## PPIが広がることへの期待

欧米ではPPIが進んでいるようですが、そもそも、なぜ、医薬品開発にPPIが重要なのでしょうか。

北村さん 最終的な医薬品のユーザーである

北村さん 長期的には、PPIが推進されることによって臨床試験や治験の課題が解決されることで開発がスムーズに進み、新薬を日本に患者さんも速やかに使用できるようになると考えられます。患者さん個人にどうては医薬品開発について理解を深めることでヘルスリテラシーが高まり、ご自分のQOLが改善されるケースもあるのではないかと思います。

奥田さん PPIに参加することで視野が広がり、海外の患者団体などとつながることもできると思います。PPIを通じて、医薬品開発のパートナーとして協働している、医療の発展に貢献しているという思いを、少しでも感じていただけることができれば、私たちとしてもうれしく思います。

奥田さん 薬の障壁は解消されていくと思いますし、患者さんにとっても、PPIに参加する意義はある

規制当局である欧州医薬品庁（EMA<sup>※7</sup>）の場合も、患者さんで構成される委員会が設けられており、製薬企業が規制当局に薬剤の開発を相談する段階や、開発後の承認申請時、販売後の安全性のレビュー期間などの各段階で、当局の審査官と同じタイミングで患者さんの視点でチェックする仕組みが整っています。

VHO-netでもPPIに参加するための研修を計画していますが、当事者の皆さんにどうては、PPIに取り組むことで、どのようなメソッドがあるのでしょうか。

北村さん VHO-netには多様な団体のリーダーの方が参加されているので、R&Dヘッドラブとしては、PPIパネルを通じてPPIに協力される方が増えることで、お互いにどうつてウインウインの状況がつくられるのではないかと期待しています。その一方で、製薬企業のアンケートに答えたり、治験や臨床試験について理解したりすることもPPIの一つです。「トレーニングを受けていないからPPIに参加できない」と諦めずにできるところから取り組んでいただけ、より多くの方に新しい医療のための一歩を踏み出していくべきだと思います。

奥田さん VHO-netは以前からPPIに積極的に取り組まれているので、PPIパネルによって患者さんとの協働をよりスムーズに行えるのではないかと期待しています。より多くの方にPPIに参加していただき、医薬品開発のパートナーとして、未来の患者さんに有用な医薬品を一緒に届けていきたいと願っています。

奥田さん VHO-netは以前からPPIに積極的に取り組まれているので、PPIパネルによって患者さんとの協働をよりスムーズに行えるのではないかと期待しています。より多くの方にPPIに参加していただき、医薬品開発のパートナーとして、未来の患者さんに有用な医薬品を一緒に届けていきたいと願っています。

当事者の声を医薬品開発に活かし、日本での課題解決に役立てたいという製薬企業や研究者のニーズに応えて、ヘルスケア関連団体はその活動の一つとしてPPIに取り組むことが求められる時代になってきたのだ

と感じます。PPIパネルへの積極的な参加も期待したいですね。

ということですね。最後に、VHO-netやPPIパネルへの期待を聞かせてください。



※6 DE&I: Diversity(多様性)、Equity(公平性)、Inclusion(包括性)

※7 EMA: European Medicines Agency

※4 IMI: Innovative Medicines Initiative

※5 EUPATI: European Patients' Academy on Therapeutic Innovation

# 研究者や企業に働きかけて治療薬開発を実現 車いすユーザーのためのアプリも開発し、 社会貢献を目指す

2024年12月に販売が開始された「GNEミオパチー<sup>※1</sup>」治療薬は、患者団体が行政や研究者、製薬企業に熱心に働きかけ、連携して取り組んだ結果として誕生した薬です。NPO法人PADM<sup>※2</sup>(遠位型ミオパチー患者会)代表の織田友理子さんは、当事者としての視点を活かし、車いすユーザーのためのアプリ開発も実現し、国内外で注目される存在となっています。今回のフォーカスオーンでは、織田さんに治療薬やアプリ開発の経緯と、活動を支える思いをお聞きしました。



NPO法人 PADM 代表  
認定NPO法人 ウィーログ  
代表理事  
織田 友理子 さん

まず、治療薬開発の経緯を  
教えてください

「GNEミオパチー」は、手足の先など体幹から遠い部位より筋力低下が始まり、徐々に全身に及ぶ進行性筋疾患の一種で、日本国内の患者数は1000人に満たないとされる希少病です。

私たちは、2008年から任意団体「PADM」遠位型ミオパチー患者会として活動を始めました(2013年に法人化)。2009年にGNEミオパチーに対するシアル酸補充療法の有効性を研究するマウス実験が行われてること

バリアフリーのアプリはどのような  
きっかけで生まれたのですか

とを知り、研究代表者の西野三先生(国立精神・神経医療研究センター)に面会し、創薬をお願いしました。また、難病指定と治療薬実現を訴えて署名活動を行い、6年間で204万人の署名を集めて厚生労働省に提出し、2015年に指定難病となりました。

並行して、治療薬開発を多くの製薬企業に働きかけましたが、莫大な資金がかかると断られ続けました。ようやく1社が公的助成を得られることを条件に協力を名乗り出してくれたので、行政機関への陳情を何度も行い、助成金を獲得。2010年から青木正志先生(東北大)が中心となって医師主導治験が始まりました。そして、2024年3月に治療薬が正式に承認され、12月から販売が開始されました。

「WheeLog! (ウィーログ)」は、車いすユーザーが利用できる地図や設備をみんなで共有できるバリアフリーマップです。これまで健常者を巻き込む活動を目指していたと考えるようになりました。その後、2014年に「車椅子ユーザー」という動画チャンネルをつくりました。しかし、「一方的な情報発信ではなく、双方で情報を共有できるプラットフォームが必要」と

バリアフリーマップ「WheeLog! (ウィーログ)」アプリ



※1 GNEミオパチー：遠位型ミオパチーの代表的な型のひとつ  
※2 PADM : Patients Association for Distal Myopathies

国連ハイレベル政治フォーラム(HPLF)でのスピーチ



行政や製薬企業への働きかけや連携に際して、どのような点に留意しましたか

「私たち、治療薬開発を目標に、「何もしなければ、何も変わらない。」とスローガンを立てて署名運動や治験参加者募集などに取り組んできました。目標を明確にして、自分たちが今、何をなすべきか、何が必要かと考えて広く発信しながら活動した結果、協力者が増えてきたという実感があります。治療薬開発が始まっているから、同じ目標に向かって製薬企業や研究者の皆さんと一緒に歩む」という思いで、密に連携を取りながら私たちにできることは少しでも役に立ちたいと活動してきました。改めて、治療薬開発は本当に多くの皆さんの協力で実現したことだと感謝しています。そして、私たちの取り組みが、まだ治療

を考えるようになり、米グーグル社主催の社会貢献アイデアコンテスト「Googleインパクトチャレンジ」に応募し、グランプリ賞金5000万円を得ました。そして、福祉工学の研究者である伊藤史人さん(現・岩手県立大学)やロボット研究者の吉藤オリイさん(オリイ研究所)らの協力で、車いすユーザーが安心して外出できる「バリアフリーマップ「Wheelog! (ウェーログ)」というアプリを開発したのです。

### 症状が進行する中でも、精力的に活動されている織田さんのモチベーションはどこから生まれてくるのでしょうか

私は、患者であり、重度障がい者ではあります。が、とても恵まれていると思っています。夫をはじめ、私という人間を理解し、手を貸してくれた環境に恵まれている当事者は少ないです。そのため、私は、患者であり、重度障がい者ではあります。が、とても恵まれていると思っています。夫をはじめ、私という人間を理解し、手を貸してくれた環境に恵まれている当事者は少ないです。

私は、患者であり、重度障がい者ではあります。が、とても恵まれていると思っています。夫をはじめ、私という人間を理解し、手を貸してくれた環境に恵まれている当事者は少ないです。そのため、私は、患者であり、重度障がい者ではあります。が、とても恵まれていると思っています。夫をはじめ、私という人間を理解し、手を貸してくれた環境に恵まれている当事者は少ないです。

法のない難病の患者団体の活動のモデルケースになればいいなど考えています。

### 団体のリーダーとしては、どのような思いがありますか

「まねきねこ」では以前から、治療薬開発に向けたPADMの活動に注目していました(2012年第32号掲載)。行政や研究者、企業、支援者との連携や協力を得て、前向きに進む織田さんの活動は、多くのヘルスケア関連団体の皆さんにとっても参考になるのではないでしょうか。



取材を終えて まねきねこの視点

「まねきねこ」では以前から、治療薬開発に向けたPADMの活動に注目していました(2012年第32号掲載)。行政や研究者、企業、支援者との連携や協力を得て、前向きに進む織田さんの活動は、多くのヘルスケア関連団体の皆さんにとっても参考になるのではないでしょうか。

### 織田友理子さんプロフィール

NPO法人PADM代表、認定NPO法人ウイーログ代表理事。2002年22歳で遅位型ミオパチーと診断される。2005年に結婚、翌年長男を出産。2019年国連後援のワールドサミットアワードでグローバルチャンピオンを受賞。2023年ジャパンSDGsアワードにおいてSDGs推進本部長(内閣総理大臣)賞受賞。2025年7月国連本部での国連ハイレベル政治フォーラム(HLPF)で、日本のSDGsに関する取り組みの発表に参加。



NPO法人PADM(遅位型ミオパチー患者会) <https://npopadm.com/>  
みんなでつくるバリアフリーマップWheelog! <https://wheelog.com/hp/>

りの管理は別団体で行っています。

診断を受けた際、医師からは「患者数が少ないから同じ病気の人に会うのは難しいだろう」と言われました。しかし、インターネットが発達したし、私は首から下が動かせませんが、視線入力装置で国内外の人とコミュニケーションがでけています。想像の域を超えて社会が変わり、私たちを取り巻く状況も変わってきました。だからこそ、時代に合わせて、常に活動をアップデートしていくことが必要だと思います。

その一方で、インターネットやSNSで患者同士がつながることはできますが、ただ知り合うのではなく、患者が安心してつながり、より良く生きるという思いを分かち合えるのは患者団体だと思います。これからも、何があつても安心してつながれる場の提供という、団体としての使命を守りつつ、社会的に信頼される活動に取り組みたいと思います。

# 活動 紹 介



ボート5か条】の発行などの取り組みや、企業との関係性、主体性をもつた活動のあり方、今後の活動の広がりへの期待などを述べました。次に日

### 参加団体

- あけぼの会 あけぼの埼玉
  - 日本ALS協会 沖縄県支部
  - 沖縄県網膜色素変性症協会
  - NPO法人 がん患者団体支援機構
  - がんの子どもを守る会 熊本支部
  - CMT友の会
  - しらさぎアイアイ会
  - (一社)全国心臓病の子どもを守る会
  - NPO法人 東京難病団体連絡協議会
  - 富山IBD
  - (公社)日本オストミー協会 横浜市支部
  - NPO法人 日本オスター病患者会
  - NPO法人 日本マルファン協会
  - NPO法人 PAHの会
  - (公社)やどかりの里

### 参加团体

- いしかわSCD・MSA友の会
  - 北陸リウマチ膠原病支援ネットワーク
  - 富山IBD
  - 日本ALS協会 富山県支部
  - ポリオ友の会東海
  - 全国膠原病友の会 高知支部
  - 認定NPO法人 アジビセイフ



第55回関東学習会が、東京のファイザーブルネルホールで開催されました。この学習会は、関東学習会の年次総会として、毎年開催されています。今年は、VHO-net監事の喜島智香子さん(ファイザーブルネルホール)が、VHO-netの成り立ちや法人化後の活動について紹介。続いて、VHO-net代表理事の増田一世さん(やどかりの里)が、VHO-netで語る「私たちの社会的存在意義」を年間活動目的としていることや、そのための関東学習会では、「改めてVHO-netを考える」を今回のテーマに設定。VHO-netが目指していることや、そのための必要な活動や役割について共有することを意図した内容です。

いて紹介。続いて、VHO-net 代表理事の増田一世さん(やどかりの里)が「VHO-net と私たちの役割について」と題して、『』

体の活動に役立つ」「もっと広く私たちの声を届ける方法を考えていきたい」「緩やかなつながりで若い人を活動に巻き込んでいきたい」などの意見が紹介されました。

今回は、初参加者も多く、またオンラインでは全国各地からの参加もあり、多様な意見が交わされ、多くの気づきが得られる場となったようです。

本オストミー協会の山根則子さんが「VHO-netとの出会い」として、活動に参加してさまざまな役目を担うことで学びや気づき、勇気やモチベーションを得て、所属団体や地域の活動にも活かしてきたこと、その成果とも言える現在の取り組みなどについて述べました。その後、発表の感想や今後の活動について話し合うグループ討論を実施。グループ発表では、「多様な団体のメンバーとの対話で気づきや元気が得られました」「リーダーシップの大切さを学んだ」といった取り組み、学びなどを聞かせていただきました。

第36回北陸学習会がオンラインで開催されました。テーマは、「みんなの防災常備ってどんなこと? 座談会」北陸編～です。

方法を確認しておくことの大切さなどが述べられました。

まず、公立穴水総合病院の影近謙治さんが、「障害者の災害時の対応を考える」弱者を排除しない共助社会づくり」と題して講演を行いました。能登半島地震で大きな被害を受けた輪島市に隣接する穴水町。避難所でのトイレの環境整備、体操指導、災害後の地域リハビリテーションの取り組みや、地域の信頼と絆がつくる社会資源の重要性などについて語られました。

確認は団体で地域ごとにまとめた「範例トドケーション」を参考に、各団体で問題を挙げて話し合った。その結果、問題は「易トイレは種類により捨て方が異なる」「IBD当事者が避難所に食べられるものではなく、備蓄の大切さを痛感した」「給電車の利便性を理解した」などの意見が挙がったほか、「要冷蔵の薬の保存をどうするか」などの課題も浮き彫りになりました。

## 第55回 関東学習会

さらなる展開につなげるために  
VHO-netの果たしてきた  
役割や経緯を知る

(2025年6月7日ハイブリッド開催)



## 第36回 北陸学習会

能登半島地震を振り返り  
防災への取り組みに活かす  
座談会を行う

（2025年6月15日オンライン開催）



地域でのネットワークを広げ、情報やノウハウを共有し、活動を充実させていくこうとする、各地での取り組みをレポート

\*その他の地域学習会の報告は、VHO-netのウェブサイトをご覧ください

会が、せんたいメ  
ディアテークとオ  
ンラインのハイブ  
リッド形式で開  
催されました。  
東北学習会では  
「難病・障がい者・  
誰でも生き生き  
と暮らせるため  
に」をテーマとし  
て、昨年からヘル  
スケア関連団体  
の目的と役割、  
社会とのつなが  
りについて学んできました。今回は、社  
会とのつながりを事例から学ぶことを  
目的に、全国心臓病の子どもを守る会  
岩手県支部長の菊池信浩さんと、  
ME/CFS支援ネットワーク理事の  
赤垣敏子さんが発表を行いました。  
菊池さんは、教育機関とのつながりと  
題して、小・中・高・大学等の学校への  
出前授業や、学生ボランティアとの協働  
を紹介。活動に参加した学生が医療者  
や教育者となり、その後も団体にかか  
わる例もあり、社会への広がりを期待  
していると述べました。赤垣さんは、行  
政とのつながりをテーマに、市長への要  
望書提出の経緯や、行政関係者との情  
報共有や連携を紹介。患者が安心して



## 活動紹介 第64回 (2025)



### 第46回 東北学習会

## 教育や行政との連携の事例を学ぶ

(2025年7月5日 ハイブリッド開催)

第46回東北学習  
会が、せんたいメ  
ディアテークとオ  
ンラインのハイブ  
リッド形式で開  
催されました。

東北学習会では  
「難病・障がい者・  
誰でも生き生き  
と暮らせるため  
に」をテーマとし  
て、昨年からヘル  
スケア関連団体  
の目的と役割、  
社会とのつなが  
りについて学んできました。今回は、社  
会とのつながりを事例から学ぶことを  
目的に、全国心臓病の子どもを守る会  
岩手県支部長の菊池信浩さんと、  
ME/CFS支援ネットワーク理事の  
赤垣敏子さんが発表を行いました。

### 参加団体

- 仙台ボリオの会
- 全国膠原病友の会  
福島県支部
- ME/CFS支援ネットワーク
- (一社)岩手県腎臓病の会
- 全国心臓病の子どもを守る会  
岩手県支部
- 患者会ピンクのリボン
- 乳癌患者会 ブリティふらわあ
- NPO法人 宮城県患者・家族  
団体連絡協議会
- (公社)日本オストミー協会  
横浜市支部

暮らすためには行政とのつながりや信  
頼関係を深め、声を届け続けることが  
大切だと訴えました。

グループ討論では、事例発表への感想や  
所属団体での取り組みなどについて話  
し合いを実施。グループ発表では、「団  
体がもつ知識や経験は大きな社会資  
源」「教育や行政だけでなく、他団体と  
つながり、ともに支え合うことが必要」  
「次世代へのアプローチが必要」などの意  
見が挙がりました。

その後、全国保険医団体連合会事務  
局の曾根貴子さんが講演を行い、マイ  
ナ保険証を取り巻く課題などを紹介  
しました。

最後に学習会全体の感想を述べ合い、  
東北福祉大学講師の工藤洋子さんは、  
「当事者と健常者の壁を取り除くよう  
な活動が必要だと、改めて感じた」と  
発言。多くの事例や課題を共有し、そ  
れぞの立場から社会とのつながりにつ  
いて考える機会となりました。

第47回沖縄学習会が、浦添市産業振  
興センターで開催されました。今回は、  
第24回ヘルスケア関連団体ワークショッ  
プを踏襲し、ヘルスリテラシーについて  
の学びがテーマです。

まず、聖路加国際大学大学院看護学  
研究科教授、中山和弘さん製作の動  
画「なぜ私がヘルスリテラシーに注目す  
るのか」を視聴。その後、同教授が監修  
しファイザー株式会社が発行した冊子  
『納得する治療を選択するために大事  
なこと！－ヘルスリテラシーって何だ  
ろう－V.O.I.1解説編』の、「合理的  
な意思決定胸に『お・ち・た・か』」の  
部分の読み合わせを行いました。

続いて、「お・ち・た・か」意思決定ガイド  
に沿って、自分のストレス対処法について、  
おIIオプション(選択肢)、ちII長所、  
たII短所、かII価値観の各項目を記  
入し発表しました。「長所・短所の記入  
は考え方整理する訓練になる」「選択肢  
を見ると、家族に話す、インターネット  
通販をするなど、依存傾向にあること  
がわかった」「自分はストレスに弱いと感  
じた」など、意思決定ガイドによる自己  
分析での気づきがあつたようです。

全体討論では、「身近な人の意見に惑  
わされがち」「なぜ、根拠のない情報に  
流されるのか」「自分主体で決める」「幸  
福感につながる。自己決定ができるよ  
うになりたい」「沖縄独特の文化として  
ユタ(靈媒師)に意見を聞くケースも多  
い」「日本人は他人がどうしているのか  
気にしやすい」など、信頼できる情報を  
正しく選ぶための方策や課題について  
意見が交わされました。



### 参加団体

- 日本ALS協会 沖縄県支部
- 日本オストミー協会 沖縄県支部
- 全国膠原病友の会 沖縄県支部
- 沖縄県網膜色素変性症協会
- 認定NPO法人 アンビシャス



### 第47回 沖縄学習会

## ヘルスリテラシーについて学ぶ

(2025年7月6日 対面開催)

6

# 精神保健福祉士

心のケアと生活支援  
双方が求められる専門職

## 病院から司法施設まで 幅広い領域で従事

精神保健福祉士は、1997年に誕生した精神保健福祉領域の国家資格です。心に病や障がいのある人の相談や、社会復帰への訓練などを行い、他職種とも連携しながら、生活課題の解決やサポートを行う仕事です。

長いVPSW(Psychiatric Social Worker)の略称で認知されたままの精神保健福祉士は、1997年に誕生した精神保健福祉領域の国家資格です。心に病や障がいのある人の相談や、社会復帰への訓練などを行い、他職種とも連携しながら、生活課題の解決やサポートを行う仕事です。

### ■精神科医療機関

受診や入院に伴う患者や家族の悩みを受け止めながら、医師の診療に必要な情報を聞き出します。また、困りごとを聞き、支援する役割を担います。退院支援では、家族や施設の受け入れを調

整し、復学や復職、住む場所の確保などの解決策を探つていただきます。

### ■行政機関

障がい者福祉に関する相談窓口となつて市町村役場で、地域住民からの相談や各種手続き、福祉サービスを利用するための支援などを行います。精神保健福祉センターや保健所では、心の健康に関する地域全体の課題に取り組んでいます。

### ■司法施設

「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律」(2003年制定)により、社会復帰調整官や精神保健参与員への任用があり、また、刑務所、少年院などの矯正施設でも配置が進んでいます。

### ■教育機関

いじめや不登校、その他さまざまな生活上の問題についての相談援助を行います。家庭や地域の関係機関の中心となり、地域ぐるみの支援に取り組んでいます。

### ■産業分野

職場で増えつつあるストレス性疾患の予防やうつ病対策、職場復帰のための研修など、働く人の心の健康を守るための取り組みが進められています。

人に寄り添い、  
答えを導き出す「やりがい」を見出す



## 仕事DATA

### ●人 数 113,121名

※2025年5月現在、(公財)社会福祉振興・試験センターへの登録者数

### ●精神保健福祉士 試験受験資格

学歴や実務経験、養成施設の修了などにより、11のルートが設定されている。保健福祉系大学卒業ルート、同系短大を卒業し相談援助実務を経験するルート、一般大学・短大を卒業し相談援助実務の経験や一般養成施設で学ぶルートなどがある。

### ●勤務先

病院、自治体・保健所、福祉事務所、精神保健福祉センター、地域活動支援センター、児童養護施設、矯正施設、教育機関、企業など

## 参考URL・文献

(公社)日本精神保健福祉士協会 <https://www.jamhsw.or.jp/>

(公財)社会福祉振興・試験センター <https://www.sssc.or.jp/>

田中英樹 菱沼幹男編著『社会福祉士・精神保健福祉士になるには』ペリカン社 2021

WILLこども知育研究所編著『精神保健福祉士の一歩』保育社 2017

# 「知りたい情報」は何かを考え、 日々進化する情報サイト



患者さんご家族に、  
必要な情報を必要な時に  
入手していただきたい。

メディカル・インフォメーション  
& レビュー チーム



患者さんになりきって  
考えました。  
その患者さんの思いに対して、  
自分たちは何ができるのか？

インターナショナル MI  
オペレーションチーム

## ファイザーの医薬品を 処方された患者さんと ご家族に向けて

医療用医薬品は医師の処方管理のもとで使用される医薬品で、医療機関を通じて患者さんに届きます。ファイザーは2021年、ファイザーの医薬品を処方された患者

ファイザーでは、患者さんのヘルスリテラシー向上の一環として、「患者さん向けくすりの情報提供サイト」でファイザーのおくすり情報を入手できるようになっています。ここではそのウェブサイトの運営担当チームの取り組みをご紹介します。

さんとそのご家族向けに「患者さん向けくすりの情報提供サイト」を開設しました。自社の全医薬品に関する情報を掲載した、総合的な医薬品情報提供サイトで、患者さん向けのQ&Aを掲載し、薬剤名と知りたい情報のキーワードで検索すると、服用方法、主な副作用、保管方法などのさまざまな情報が得られるようになりました。

このサイトを運営するメディカル・インフォメーショングループでは、患者さんが必要とする情報は何か、わかりやすく伝えるためにはどうすればよいか、より使いやすいウェブサイトにするための工夫などを考えながら日々進化させています。

## 適正使用、 安全性の情報などを 必要な時に確認できる



このウェブサイトは、ファイザーの医薬品を処方されている患者さんやご家族の方を対象に、くすりの適正使用や安全性などに関する正しい情報を提供することが目的です。各医薬品についてわかりやすく説明した「くすりのおり」「患者向医薬品ガイド」をはじめ、添付文書など、医薬品の基本的な情報がわかる資料や、各種お役立ち情報が確認できます。特に、知りたい情報をキーワード検索することで、たとえば「飲み忘れたらどうしたらよいですか?」「どのように使用したらよいですか?」といったQ&Aを参考照できることが特徴です。



こちらのサイトからファイザーのおくすりを正しく安全にお使いいただけための情報がご参照いただけます。

<https://www.pfizermedicalinformation.jp/?gp>



ファイザーでは、自社の医薬品を処方されたより多くの患者さんとそのご家族に、正しい情報をわかりやすく、必要な時にお届けしたいという思いで、ウェブサイトを運営しています。こちらの詳細な記事は、ファイザーの一般向け企業サイトからご参照いただけます。

<https://www.pfizer.co.jp/pfizer/company>  
(会社案内→ファイザー日本法人最新の取り組み)

ファイザープログラムの助成を受け活動した団体、その後をレポートします。

OHANA

一般社団法人

性被害当事者が自尊心や自己肯定感を回復し、生活を再建するには、安心して過ごせる居場所が必要とされます。(一社)OHANAは、緊急的なニーズにも対応しつつ、アトリエや農園といった当事者が継続的に立ち寄れる居場所を提供し、心のよりどころとなる“ものづくり”を通して支援に取り組む団体です。過去の性被害を誰にも相談できず、一人で悩みを抱え込んできた当事者にも寄り添う息の長い支援を行い、地域でのセーフティネットづくりを目指す同団体についてご紹介します。



一般社団法人 OHANA  
代表理事  
赤松 未来 さん

活動内容やその背景について教えてください

私たちは性被害当事者に対して支援活動を行っている団体です。『オハナ』とはハワイ語で家族という意味で、当事者の家族になりたいという思いから名づけました。

活動としては、相談業務(電話・メール・来所)や、関係機関への同行支援、緊急時の受け入れなどに加えて、『ものづくり』をツールとして、社会復帰を目指した継続的な支援に取り組んでいることが特徴です。『被害を話すことはつらいが、安心して過ごせる居場所がほしい』という当事者に居場所を提供し、『ものづくり』を通して信頼関係を築き、社会参加のきっかけにすることや、『ものづくり』を目的に何度も足を運んでもらう

ことで孤立を防ぎ、中長期的な支援につなげていくことを目指しています。さらに、当事者がものづくりのスキルを身につけ、ネットショッピングや

イベントなどで作品を販売できるよう支援することで、社会復帰の準備や就労体験となることも視野に入れています。「作品が売れる」ことで自分が求められていると実感します。

社会復帰の準備(就労スキルの習得支援就労支援)ができる場所を確立するというプロジェクトで応募しました。

具体的には、ファイザープログラムの助成がスタートした2023年から、地域の農家から無償で提供された農地でハーブや花、野菜の栽培に取り

ファイザープログラムによりどのような活動に取り組んだのですか

小物雑貨やアクセサリーのハンドメイドができるアトリエの整備に加え、地域の農地を活用した畑作業により、ものづくりを充実させて、性被害当事者的心身のケアと、安心して



夏休みこどもわくわくフェスタ2025(平塚市)に参加。  
子どもたちと石鹼づくりを行う

『ものづくり』を通して、性被害当事者が安心して過ごせる居場所を提供し、社会復帰につなげる

ファイザープログラムは、ヘルスケアの視点を重視したより良い社会への寄与を目的として、心からだのヘルスケアの分野で活躍が期待される市民活動・市民研究を応援する助成プログラムです。2000年に創立されて以来、疾病や障がいを抱える方をはじめ、生活困窮者や公的制度の狭間で支援を必要とする人など、従来のヘルスケアの枠では捉えられないような対象者を支援し、また、多くの助成プログラムでは対象とならない人件費や家賃・光熱費等をカバーするなど特色のある取り組みを続けています。今回は、2022年度と2021年度に選ばれ、その後3年にわたって助成を受けてきた2つのプロジェクトをご紹介します。

※継続助成募集は2023年度で終了



地域のイベントで作品を販売

自分たちで栽培したラベンダーでポプリを製作

組み、ハーブはポプリに、花はドライフラワーに加工して販売しています。畑作業は、ハンドメイドが苦手という方にも参加してもらえますし、経済的に厳しい状況にある方に収穫した野菜を渡すこともできます。農家の方が栽培についてアドバイスしてくださるなど地域との交流もできるようになりました。また、被害を受けて発症した精神疾患やその治療薬によって、不眠や夜型の生活

## ファイザープログラムは どのような点が よかつたと思われますか

になつてゐる当事者も少なくないのですが、昼間、畑作業に参加することで、朝起きて夜は眠るという本来の生活リズムを取り戻すこともでき、とてもメリットの大きい取り組みだと感じています。

助成金の使い道の自由度が高く、さまざまなことに挑戦できる機会が得られるのが、とてもありがたかったです。農地の活用に当たっては、土壤改良やトラクター購入から始めたことで、その後の活動がとても充実しましたし、今まで接点のなかつた近所の農家の方など地域の協力が得られるようになりました。

また、プロジェクトの申請や報告といったプロセスの中で、さまざまな助言を受けて団体運営や活動について学べたことも大きかったです。3年目と助成を続けて受けられたことで、活動を広げたり充実させたりしていくことができ、常に見守ってもらつていて安心感が得られました。「助成金だけではなく、心や力もいただいた」と感じています。

## 当事者を支援するうえで、 どのような課題が ありますか

当団体への相談者は40代の女性が多く、これは神奈川県全体でもみられる傾向です。DV防止法やストーカー規制法\*がなかつた時代に性被害を受け、公的支援や適切な支援を受けられず、誰にも相談できなかつたという人が、近年の芸能界の性被害報道などに接してフラッシュバックを起こしている例が増えているのです。

また、性被害を受けたことで精神疾患を発症して、服薬を中心とした精神疾患治療しか受けることができなかつたケースや、家族や親族からの性虐待等で所轄が児童相談所であつたために、性被害に特化した治療が受けられなかつたケースなど、複雑化した相談も増えています。性被害の背景には経済的な問題や家庭的な問題などがあることも少なくありません。こうした公的支援の対象になりにくい当事者の支援が大きな課題だと感じています。

## では、今後に向けての 展望を聞かせてください

農地の活用を通して地域からの当団体への理解も深まつてきていますので、一步進めて、近隣の保育園などでの野菜の出張販売を計画しています。

### 一般社団法人 OHANA

2016年12月任意団体設立。2019年9月非営利型の一般社団法人OHANAへ移行。神奈川県平塚市を拠点に活動。2022年にファイザープログラム新規助成に応募して選定される。

#### プロジェクト名と助成額

- 2022年度(1年目) 「ものつくり」をツールとして、性被害当事者が安心して心身を回復し、社会復帰を目指せる居場所の確立と地域ネットワークの構築事業 250万円
- 2023年度(2年目) ものつくりを通して性被害当事者が安心して社会復帰を目指せる居場所の確立 250万円
- 2024年度(3年目) ものつくりを通して性被害当事者が安心して社会復帰を目指せる居場所の確立 280万円



<https://www.yhw-ohana.com/>

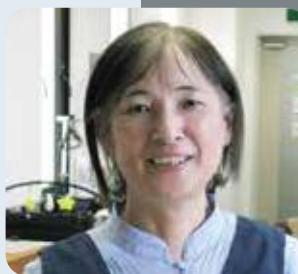
また、平塚市では2025年から犯罪被害者等支援条例が施行され、当団体の活動に協力したいとの意向もあるので、登録団体申請を予定しています。

最近、支援を求めてこられる当事者の方たちが立ち直られて、社会復帰につながるケースが増えていますので、私たちもさらに活動を充実させて、当事者がより暮らしやすい、社会復帰しやすい地域へと変えていきたいと考えています。公的支援が受けられない当事者も安心して働き、暮らせる環境を整えるため、地域イベント出展などを通して地域とのつながりを深め、当事者が安心して生活できる民間セーフティネットを構築し、行政とも連携しながら、社会参加や経済的自立がしやすい地域づくりを目指したいと思います。

\*DV防止法：配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律  
ストーカー規制法：ストーカー行為等の規制等に関する法律

ファイザープログラムの助成を受け活動した団体、その後をレポートします。

グルテンフリーの食事が話題を集めたり、商品パッケージにアレルゲンが表示されるなど、近年、食物アレルギーは社会で認知され、ある程度の対応、配慮がなされるようになってきました。しかしながら、人生の各ステージで食物アレルギーの子どもが抱く疎外感は残り、災害時対応などには配慮が行き届いていません。ファイザープログラムを活用し、子ども視点の自立支援の調査研究を実施し、課題に取り組む、FaSoLabo（ふあそらぼ）京都の創設者であり理事の小谷智恵さんにお話を伺いました。



認定NPO法人 FaSoLabo京都  
理事  
小谷 智恵 さん  
おだに ともえ

設立の経緯と  
社会的な背景について  
教えてください

## 子どもの視点からの自立支援と 食物アレルギー児・家族の QOL向上を図る

当団体は、食物アレルギーの子どもと家族のQOLの向上を目指し、任意団体として2005年に発足。食物アレルギーの私の長男が小学校入学のタイミングでした。当時は、食物アレルギーがあると保育園入園もままならず、小学校や学童保育でも対応や理解が広まっていませんでした。当初の活動は、ニュースレターを発行し、アレルギーに関する情報を発信。保護者だけの会ではなく、医師、行政、子育て支援者との横のネットワークの構築を目指し、保育園・幼稚園・学校・地域の子育てサークルでの食物アレルギーへの理解を求めてきました。ところが活動を続ける中、子どもの

ファイザープログラムの  
内容やよかつた点について  
教えてください

ためとは思いつつ、保護者目線での子育て支援にならないかと感じるようになりました。きっかけは5年ほど前の中学生への調査です。「周りの人や学校にでもらったことでよかったことは」との問いに、「人が」「何つ、うれしかったことはない」と回答しました。私たちの活動が、子どもにとってよかつたのか、検証をしてこなかつたことに気づいたのです。そんな気づきもあり、ファイザープログラムの市民研究の種別で、「食物アレルギーの子どもが必要としている子ども視点の自立支援の調査研究」を申請し採択されました。

長期で調査・分析に取り組みたいと

いました。

考えていたので、3年間の継続助成があることが大きな魅力でした。1年目に調査を行い、2年目は調査票には現れていない声を拾う、3年目はインターネットなどで、紙での回答と実際の声の違いはどうかを比較し、医師との考えの違いも調べたい。そんなシナリオを描きました。領収書の提出が不要なことは、ほかの助成金ではあり得ないことで驚きました。私たちのことを信頼してくれていることが伝わり、誠実に対応しなければと、よい意味でのプレッシャーになりました。また、計画変更に対する自由度が高く、提出した計画よりも、こちらの方が重要だと思えば変更できる。研修を受けたい、学会に参加したいとなつたときも費用を転換でき、とてもありがたいと思いました。

# FaSoLabo京都

認定NPO法人

「Fa」は food allergy(食物アレルギー)  
「So」は social work(ソーシャルワーク)  
「sower(種をまく人)  
「Labo」は Laboratory(研究所)

社士の資格を取り、助成期間中の2023年には調査の分析方法を学ぶために大学院に入学。現場と研究者、両方の視点をもつことを目標しました。

## どんな成果や課題が見えてきましたか？



調査では、小学生から大学生まで、さまざまな年代の子どもたちの声を聞くことができました。年代によつて、抱える思いは違つてきます。小学校の低学年では、命を守るためにも、食物アレルギーであることを言ひなさいと患者教育されます。高学年になると放課後にファストフード店に行くときにどうするか、中学生では修学旅行や学校行事のときは言う必要がある、高校生では食物アレルギーがあるから就けない職業があるのではないか、大学生になり家を離れると、自分が食物アレル

ギーだと知る人がゼロになり、自分がいかに地域で守られていたかを知り、これからは自分で判断していくかなければならないと思う。これらはほんの一例ですが、どういうタイミングでどんな風に周囲に伝えればよいか、あまり教えられていないのです。

食物アレルギーではない高校生や大学生にも調査を広げたことは大きな成果でした。ニュースなどで食物アレルギーのことは何となく知つていたが、身近にいたらどう接すればよいのか、外食に誘うにはどう声かけすればよいか、友だちを思つての声が多く見られました。見えない疾患だけに、伝える方も伝えられる方も気をつかう、難しい問題です。食物アレルギーの子ども自身が望む生活や未来のために、社会に向けて発信できる環境をつくることが大切です。

## 今後の展望について教えてください

この20年間で、食物アレルギーへの理解は徐々に広がつてきました。私たちの世代が、食物アレルギーでの死亡事故などもあつた関係から、子育ての大変さを前面に伝えてきたと思います。そのことで、地域社会で食物アレルギーの子どもを受け入れるのは難しいと、逆にハードルを上げてしまったのではないかという反省もあります。



京都市乳幼児親子のつどいの広場 びいちゃん

2022年から始めた「どれみ隊プロジェクト」は、食物アレルギーの有無にかかわらず、集まつた子どもたちが挑戦したいこと、社会に伝えたいことをサポートする活動です。米粉のパンを作る調理体験や、身近なお店で食べられるお菓子を探す、防災などのテーマで、活動に取り組んでいます。

「京都市乳幼児親子のつどいの広場 びいちゃん」は、京都市からの委託事業で、食物アレルギーがあつてもなく



ても親子が集える場所です。子育て相談員が常駐し、誰でも利用でき、その中で食物アレルギーの正しい理解や配慮も伝えています。これからも、子どもの声を聞く・届けるというスタンスで、研究や活動に取り組んでいきたいと考えています。



### 認定NPO法人 FaSoLabo京都

- 2005年4月 任意団体「びいちゃんねっと」として設立
- 2009年3月 「NPO法人 アレルギーネットワーク京都 びいちゃんねっと」に改組
- 2015年 京都市子育て支援活動いきいきセンター事業を受託し、乳幼児親子のつどいの広場を開所
- 2018年 「認定NPO法人 FaSoLabo京都」へ法人名変更プロジェクト名と助成額
- 2021年度(1年目)「食物アレルギーの子どもが必要としている子ども視点の自立支援の調査研究」助成額131万円
- 2022年度(2年目)「食物アレルギーの子どもが必要としている子ども視点の自立支援の調査研究」助成額150万円
- 2023年度(3年目)「食物アレルギーの子どもが必要としている子ども視点の自立支援の調査研究」助成額150万円

# 患者の力

## 人類にとっての ケアの姿とは

### はじめに

21世紀はケアの時代ともいわれています。社会の高齢化と慢性疾患者の増加のために、ケアを受ける人の数が急激に増加していることが因です。しかし、それだけではなく、AIやロボット技術・ITC(情報通信技術)の発展により、人が行べき仕事は機械ではできないものへと移行していくと考えられるため、ケアが注目されているのです。今後、社会の中でケアのニーズは量的に増えるだけではなく、質的にも飛躍的に高められることが期待されます。

記憶力やロジックによる判断、画像処理による診断などはAIの進歩に伴い、近い将来人間を凌駕するといわれています。そのときに、人間がやるべきこととして残されるのが「ケアとアートと祈り」というのがわたしの推測です。そして、その三つの中ではケアがそれらの根底にあります。

### ケアの起源、ケアの本質は 毛づくろいに始まる

それでは、ケアとは一体どのような行為なのでしょうか? 梶田昭による『医学の歴史』<sup>1)</sup>では、医療は人類の始まりとともにあつたと述べられています。そして、医療の原型は人類が存在するより前から存在していたといいます。たとえば、鳥やサルでは、毛づくろい(グルーミング)をする行為がみられ、その

行為は2億年以上も前から存在していたのです。

チンパンジーの毛づくろいを観察すると、相手の肉体の欠陥部位を見つけ、たとえば小さな腫れ物や傷などをなめてきれいにするそうです。灰のかげらが目に入つたサルに対して、別のサルが両手で灰を取り除こうとする行為も見られるそうです。ここまでくれば、その行為は医療に相当するものであると誰もが考えるのではないでしようか。

キツネザルの毛づくろいはもっぱら衛生上の理由であり、ほかのサルに毛づくろいしてもらうのは、自分の手が届かない部位(頭皮や背中)に集中するのだそうです。毛づくろいがお互いを有益な行為、お返しの行為とする社会協定があるようですね<sup>2)</sup>。ダンバーは、毛づくろいがお互いを助け合わせ、その行為が集団生活を生み出したと、以下のように述べています<sup>2)</sup>。

社会的グルーミングを行なう哺乳類は多いが、靈長類ほど活用している例はほかに見あたらない。社会性の強いサルや類人猿ともなると、一見取るに足らないこの活動に「一日の五分の一」を費やすのだ。相手の毛を少しずつかきわけては、ごみや草、かさぶたなどを取りのそくのだから、意味がないわけではない。けれども社会的グルーミングの真の価値は、毛のなにかに指をすべりこませ、皮膚に軽く、ゆっくりと触れる手の動きにある。この動きに反応するのが、脳に直結しているC触覚線維と呼ばれる求心性神経だ。

つまり、毛づくろいが受け手のエンドルフィンを高め、免疫力を高め、幸福感や快感をもたらし、集団の結束を高めるのです。結果として、人類の集団はより大きくなります。お互いにグルーミングできる規模の約50人を超えたために生み出されたのが、笑い、歌、踊りであり、物語を語ること、宴、そして宗教であるというのです<sup>2)</sup>。

その唯一の役割は脳の奥深くでエンドルフィンの分泌をうながすことにある。(中略) 日常的にグルーミングし合つ相手に責任と恩義を感じれば、それが社会の結束を保つ接着剤となる。ただグルーミングは親密度の高い行為なので、相手は數に限りがあり、それがすなわち結束社会集団の上限となる。サルおよび類人猿では50頭前後である。(中略) そのためサルと類人猿の場合、結束社会集団の大きさはおよそ50頭で頭打ちになる。私たちの祖先は、社会集団を拡大する必要に迫られたとき、一人以上に同時にグルーミングする方法はないかと知恵を絞った。こうしてたどりついた唯一の現実的な解決策が、直接触れることがなくエンドルフィン分泌をうながす一連の行動だった。それはいまも、私たちの社会的な相互作用の中核となっている。獲得した順に行動を並べると、笑うこと、歌うこと、踊ること、感情に訴える物語を語ること、宴を開くこと(みんなで食事をして酒を飲む)で、最後に忘れてはならないのが宗教儀式だ。いずれも言葉に依存するため、ヒトにしかできない行動である。唯一の例外があるとすれば、最も早くから存在した笑いだろうか<sup>2)</sup>。

筆者



慶應義塾大学 名誉教授  
加藤 真三 さん

このような視点に立つと、毛づくろいをするというケアの行為が、言葉、芸術、会食、お祭りや宗教の根底にあつたことがわかります。そして、それらが人類を特徴づけ、繁栄させてきたのです。高学歴で理知的な人はたわいもない会話(ゴシップ話)を軽視する傾向がありますが、実はこのゴシップ話が人間の連帯を高めるうえで重要な行為でもあつたといいます<sup>2)</sup>。人間としての最も本質的な活動は、ケアに始まり、言語やアートにつながり、さらには宗教を生んだのです<sup>3)</sup>。

## ケアとは

ケアとは、本来「気遣い、配慮、世話」などの意味をもつ言葉です。他者とのかかわりの中で生まれる最も人間らしい行為です。わが国でスピリチュアルケアの普及に取り組んでこられたキッペス神父は、ケアについて次のようなことを述べています<sup>4)</sup>。

ケアされること、ケアすることは、ともに最も人間的な行為である。人間は人間である以上「お世話」なる存在であり、お世話になるのは当然である。人間は一人で生きていられず、相互にお世話にならざるをえない存在である。お世話になることは病気になつてゐるためではなく、人間であるからである<sup>4)</sup>。

ケアにはその行為を通じて、ケアされる側だけでなく、ケアする側にも力が与えられる側面があります。それは人間として生きることの普遍的な欲求に基づいています。「愛のホルモン」とも呼ばれているオキシトシンというホルモンは、愛する心や共感・寛容する心を育んだり、信頼する気持ちを高めたりします。オキシトシンは、暖かい環境や身体接触、他人に親切にされたり、親切にしたりすることにより、分泌が増加します。そのような物質が分泌されるような遺伝子を、人間は与えられた存在なのです。

ケアは本来家庭の中やコミュニティの中で行われた行為でした。乳幼児のケアに始まり、高齢者のケア、そして病人のケアや障がい者のケアなどは通常家庭内で行われ、多くの場合、女性がその仕事を担つてきました。

## 職業としてのケアの問題

は全産業平均の6割程度という低さでしたが、2021年政府は「福祉・介護職員処遇改善臨時特例交付金」を新設し、2022年より交付金を支給する施策がスタートしました。

しかし、その後の社会の発展で、仕事の分業化が始ままり、ケアも社会の中で職業として行われることになり、家庭内行為が外部化されてきました<sup>5)</sup>。人間社会が高度化・分化してきた必然の結果です。教育や医療も、かつては家庭の中で行われてきましたが、社会の発展で、仕事が外部化されてきたことと同じ流れです。

教育や医療が専門性の高い職業としての一定の地位を築いてきたのに比べて、ケアは専門性や熟練性が低い仕事とみられてきました。ケアは女性の仕事であり、(実際にはそうではないのですが)誰にでもできる仕事であり、供給者も無尽蔵にあると考えられてきた面もあります。

高度化・先進化・分業化する社会の中で、お互いがケアできるという人間的な生活を送ることができるために、ケアという行為を金銭と交換するものとしてではなく、新しい価値観が必要なのかもしれません。

わたしは、AIやロボット技術により労働時間が短くて済むようになり、給与がベースックインカムのようない形で一定の所得が保証されれば、ケアをボランティア活動としてお互いに楽しめる未来が来るのではないかと考えています<sup>7)</sup>。

## ケアの真の発展のために

介護職が人手不足のために海外からの労働者を受け入れるとき、言葉の問題でコミュニケーションも取りづらかつたり、育つた文化の違いからケアの提供が思うようにいかないことがあるのではないかと考えられます。これらの社会をより人間的に豊かなものにするためには、社会全体がケアに對してもつと高い評価をして、賃金を支払うことが必要なのかもしれません。

### 加藤 真三さんプロフィール

1980年慶應義塾大学医学部卒業。  
1985年同大学大学院医学研究科修了、医学博士。1985~1988年、米国ニューヨーク市立大学マウントサイナイ医学部研究員。その後、都立広尾病院内科医長、慶應義塾大学医学部内科専任講師(消化器内科)を経て、慶應義塾大学看護医療学部教授(慢性期病態学、終末期病態学担当)。慶應義塾大学名誉教授。エムオーエー高輪クリニック院長。

#### ■著書

- 『患者の力 患者学で見つけた医療の新しい姿』(春秋社 2014年)
- 『患者の生き方 よりよい医療と人生の「患者学」のすすめ』(春秋社 2004年)
- 『(いのち)をケアする医療 患者と医療者の新しい関係のあり方』(春秋社 2025年)



# 『まねきねこ』デジタル配信への切り替えのお知らせ

平素より、『まねきねこ』をご愛読いただきありがとうございます。

『まねきねこ』は現在、冊子とまねきねこWEB版からお読みいただけるようになっておりますが、今後はまねきねこWEB版の掲載のみ（デジタル配信）へと切り替えることとなりました。

冊子のお届けは第66号で終了となります。今後もバックナンバーも含め、「まねきねこWEB版」より、記事をご覧いただけます。バックナンバーの閲覧、記事の検索も可能です。

冊子のお届けを楽しみにされていた読者の方にはご不便をおかけいたしますが、引き続きまねきねこWEB版からご覧いただければ幸いでございます。今後とも、ヘルスケア関連団体の皆さまへのより良い情報提供を目指して参りますので、何卒ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

## ■まねきねこWEB版

<https://www.manekineko-network.org/>



## 書籍のご案内



### 〈いのち〉をケアする医療 患者と医療者の新しい関係のあり方

『まねきねこ』で連載中の「患者の力」の筆者でもある加藤眞三さん（慶應義塾大学名誉教授）の最新書籍です。

AI時代の医療に向けて患者が学び身につけるべき力とは。患者と医療者が対等な立場で対話し最適な医療を見つけることを主張してきた著者が、AI時代を前に、①医療者や家族と連帯する能力、②情報を得て見分ける能力、③自分の価値観を知る能力の三つを身につけ、いのちを大切にする医療のあり方を示す集大成。

著者：加藤眞三 サイズ：四六判・336ページ 発行：春秋社 価格：3,080円（税込）

## イベントのご案内

### 第2回患者・市民大集会～患者・市民の声を届けよう～

日 時：2025年11月27日(木)14:00～20:00

会 場：Club eX クラブエックス（品川プリンスホテル アネックスタワー3F）

開催形式：第1部のみ会場とZoomのハイブリッド形式

主 催：（一社）新時代戦略研究所（INES）

参 加 費：①患者さん・ご家族・患者団体・患者支援団体：無料（1部・2部参加可能）

②企業ならびに一般参加者：3,000円/人（※1部のみ参加の場合は、無料）

お問合せ：患者・市民大集会運営事務局（新時代戦略研究所（INES）内）

メール：[ppcip@inesjapan.com](mailto:ppcip@inesjapan.com)

イベントURL：<https://partnership-pcip.jp/news/news20251010/>

## イベントのご案内



### ■プログラム

- トークセッション（基調講演）
- 患者支援プログラム発表セッション
- 患者支援助成対象者発表・表彰

休憩・会場参加者によるネットワーキング

第2部 音楽ライブイベント

## まねきねこ 2025年 第66号

『まねきねこ』は、ファイザーの社会貢献活動における取り組みの一環として、ヘルスケア関連団体のネットワークづくりや活動を支援するニュースレターです。内容に関するお問合せは、ファイザー株式会社コミュニティ・リレーション部までお願いします。



■発行  
ファイザー株式会社  
コミュニティ・リレーション部

〒151-8589 東京都渋谷区代々木3-22-7 新宿文化クイントビル  
メール：[manekineko.info@pfizer.com](mailto:manekineko.info@pfizer.com)

## MESSAGE

『まねきねこ』は、今号で第66号を迎えることができました。創刊は2004年。それ以来、全国各地に足を運び、ヘルスケア関連団体の活動や活動にかかる多くの方々をご紹介してまいりました。今ではウェブサイトを通じて団体の情報を得ることも容易になりましたが、やはり現地で直接お話を伺うことで、『まねきねこ』ならではの視点で活動の本質に触れることができました。皆さんが地道な努力を重ねている姿を第三者の目で評価し、本当に素晴らしい活動だと感じることが多々ありました。また、取材を通じて団体を運営されている方々のお人柄に触れたことも、私たちにとって大きな喜びでした。そして何よりも、長きにわたり冊子をご愛読いただき、温かいご支援と励ましを賜りましたこと、心より深く感謝申し上げます。皆さまの応援があったからこそ、ここまで続けてくることができました。

この度、第66号をもちまして冊子での発行を終了し、今後は「まねきねこWEB版」にて皆さまの活動をご紹介していくこととなりました。これからも変わらぬご愛顧を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

COM14P002